

徳川大坂城 400 年— 本丸御殿室内空間復元プロジェクトと展覧会の開催 Part II

岩間 香

■活動内容

- ・2024 年度は徳川大坂城における将軍の生活空間である「御座御殿」を復元し模型を制作した。
- ・2024 年度期間中に大阪市立住まいのミュージアム（大坂くらしの今昔館）において特別展「徳川大坂城 400 年展」を開催した。
- ・特別展のために図録「徳川大坂城 400 年」（64 頁オールカラー）を制作し、会期中講演会を行った。

■コンセプト・ねらい

- ・2023 年度は大坂城で最高の公的空間であった「大広間」を復元した。
2024 年度は最高の私的空間である「銅御殿」を復元する。
- ・模型により「大広間」と「銅御殿」の空間と機能の違いを明確にする。
- ・模型と研究成果を今昔館の特別展と図録で、広く市民に公開する。
- ・江戸時代の大坂の繁栄を支えた徳川大坂城を広く市民に知ってもらい、地元の歴史や文化にさらに深い興味をもっていただく。

■活動実績

今年度の活動は大きく①「大坂城本丸御殿の室内空間の復元」と「②展覧会の開催」に分けられる。それぞれ昨年とは異なる多くの作業が必要であった。

①本丸御殿室内空間復元

資料収集

2024 年度は大坂城本丸御殿の「銅御殿」に関する資料収集、考察、設計、障壁画の下絵制作を行った。障壁画の記録については「摂営秘録」「御間内御張付并眞数其外共」「大坂御城案内記」「大坂御城内有増」など、主な記録 7 点から「銅御殿障壁画」に関する記述を抽出した。

障壁画の画題の決定

2023 年度に復元した「大広間」の障壁画は花鳥画であったため、江戸時代の記録には花・鳥・樹木の名前など、絵のモチーフが具体的に記されていた。同じ狩野派により同時代に描かれた二条城障壁画などを参照し、構図やモチーフの配置を決めることができた。しかし今回の「銅御殿」の障壁画は、江戸時代の記録に「山水画」「唐山水」「唐人物」など簡単な記述しかなく、画題を中国の故事を風景の中に描いたものであることは推定できたが、その具体的な画題が不明であった。これは記録をした人物も画題の知識がないためであった。その中で特に銅御殿以外の箇所でも記述の詳しい「御殿御間并画付」から上段之間は「琴棋書画図」、「大坂御城内有増」から下段は「耕作図」と決定した。

②展覧会の開催

展覧会の構成と出品交渉

展覧会は大阪市立住まい御のミュージアム（大阪くらしの今昔館）の企画展示室で、2025年2月～4月初旬に開催することが決まっていた。展覧会の構成について、大阪くらしの今昔館の関係者と協議し出品作の選定を行った。数度に渡る交渉の結果、大阪城天守閣から複数の絵と指図、大坂谷町の願生寺からは徳川大坂城の天守の立面を描いた唯一の指図、関西大学からは近世大坂を描いた屏風をお借りすることができた。

展覧会では現存しない本丸御殿の再現がテーマの一つとなっている。模型の下絵の参考としたのは同時代に同じ狩野派により描かれた二条城の障壁画である。実際の障壁画の大きさを体感する上でも、ぜひ展示したい作品であった。二条城の障壁画類は重要文化財に指定されており、事前にさまざまな手続きが必要であったが、今昔館の努力と二条城事務所のご好意で借用し、展示することが実現した。

図録の執筆

11月以降、展覧会図録の執筆に取りかかった。図録は64頁オールカラーとし、これまでの大阪くらしの今昔館の図録と同じ判型とした。章立ては(1)徳川大坂城の築造、(2)徳川大坂城の本丸御殿、(3)徳川大坂城をつくった匠、(4)城と城下の景観、とした。中井家資料の大坂城大広間と銅御殿の復元の根拠を明らかにするという研究発表の側面をもつことから、展覧会に出品しない絵画についても参考図として積極的に掲載した。

展覧会

12月以降、展示品の搬入が始まり、二条城、大阪城天守閣、関西大学、願生寺などに、美術専門運送業者、今昔館学芸員などともに分担して搬入を行った。展示に関しては今昔館の全面的な協力により、安全で効率的・効果的に行われた。2月11日に開館し、途中一度の展示替えを行い、延べ19,140人の来場者を迎えることができた。4月6日に最終日を迎え、その後順次、借用品の返却を行った。2点の模型については、兵庫県立博物館の時期展覧会への出品希望があり、今昔館に寄託することとした。

講演会

2025年3月2日（日）13:20～16:00に展覧会に関する講演会を行った。定員の2倍の申込みがあり、市民の関心の高さがうかがえた。講演後に展示会場において、簡単な展示解説を行い質問に答えた。模型についても見所などを解説し好評であった。

■成果・効果

- ・大坂城御殿に関する多くの資料を収集することができた。今回は大広間と銅御殿の模型制作に活用したが、さらに他の御殿の復元に活用することができる。
- ・展覧会では実際の資料や作品により、大坂城築造の実態や、西国の要であった城の重要性、御殿の豪華な姿を示すことができた。
- ・図録を作り、徳川大坂城に関する研究や室内空間の復元に関する研究の成果を出版物として残すことができた。
- ・展覧会では48日間で19140人の来館者があり、講演会には158人の聴講者があった。多くの質問をうけ、市民の関心を高めることができた。
- ・展覧会では大坂城を描いた絵画作品も展示した。大坂城は多くの絵画に取り上げられており、大坂の名所として、年中行事の娯楽の場として民衆に親しまれていたことが明らかになった。

■今後の展開

- ・大坂城「大広間」と「銅御殿」の室内空間を明らかにしたので、その他の「白書院」（小広間）、「黒書院」、「対面所」などの空間と機能を明らかにしたい。
- ・早くに失われた「能舞台」、「茶室」については引き続き資料を探索したい。茶室については「鎖之間」などの平面から、小堀遠州が関与した可能性が高く、新たな茶道史資料となることが期待される。
- ・幕末において14代将軍徳川家茂・15代将軍慶喜が、短期間ながら大坂城を本拠として活動した。今回の調査中、具体的な部屋の使用例が分かる記録を見い出したので、部屋と対面人物・格式・用途との関係を分析したい
- ・展覧会のために大坂城を描いた絵画を収集した結果、多くの作品があることが分かった。これらの絵の賛・作者・支持層を分析し、大坂城が絵画や詩歌などの素材となり大坂文化の源と流れを明らかにしたい。

本丸御殿室内空間復元プロジェクト（模型の制作）

室内空間の復元

1年目に引き続き…

資料収集と分析

- ① 指図と大工文書
- ② 大坂城御殿の見聞録
- ③ 二条城障壁画の調査
- ④ 狩野探幽・尚信の画跡

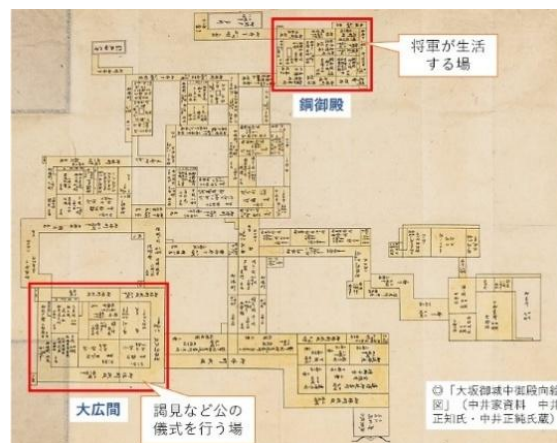


狩野探幽筆「山水図屏風」東京国立博物館蔵

◎「大坂御城絵図写」 中井家資料



「棋盤秘録」大阪市立中央図書館蔵



将軍が生活
する場

銅御殿

大広間

謁見など公の
儀式を行う場

◎「大坂御城中西略図繪
図」(中井家資料・中井
正則氏・中井正純氏蔵)

令和5年度に引き続き、図面、資料、絵師の画跡などの資料を収集した。

令和5年度は公的空間である大広間の、令和6年度は私的空間である銅御殿の復元を行った。



画家に画題と参考図を示し下絵をともに作っていく。一緒に作業を進める方が効率的であった。



建築家、模型制作者とともに1/10の模型を作る前に1/40を仮制作し細部や見え方を確認した。

大 広 間



欄間については寺院や城



大広間は豪華な金碧画と華やかな欄間に彩られていた。松は長押の上にまで枝を伸ばしている。違棚や天袋の画もすべて、指図と資料に基づき設計し、古画を参照して作画した。

銅 御 殿



銅御殿は将軍の生活の場で、水墨画の落ち着いた空間であった。大広間と異なり、長押の上下で絵が分断されていたことが分かる。現存する水墨障壁画は後世の修理により金砂子や金泥による装飾が過剰に施されていることが多い。しかし模型では完成間もない頃の白地の多い清浄な空間を再現した。

展 覧 会

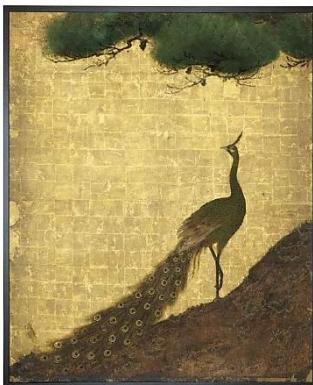


大阪くらしの今昔館の特別展として展覧会を開催。

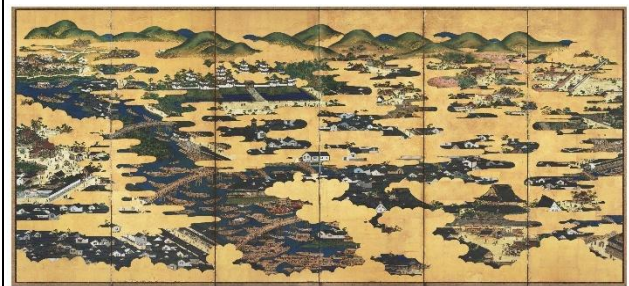
展覧会の開催と模型の作成に芳泉文化財団の助成を受けたことを記している。



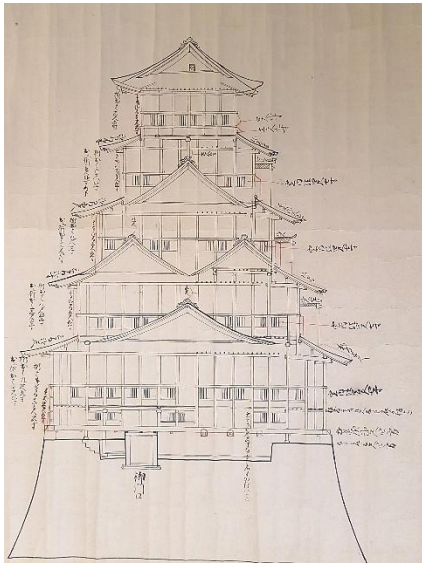
展示会場の様子。指図、文書なども多かったが、城の好きな人々の関心を集め親子連れも多かった。



重要文化財の二条城襖絵「松孔雀図」を展示。大坂城の大広間も同画題であったことが分かっている。



城下の繁栄を示す「浪花名所図屏風」(関西大学蔵)。町上方に城が大きく描かれる。



模型および資料を集めたコーナー。制作過程の写真も展示した。



3月2日に講演会を開催。156人の聴衆が参加した。建築絵図、大広間と同御殿の障壁画再現の過程、城を描いた絵画を紹介した。講演後、展示会場で解説を行い好評であった。